クレイジーパラダイスへようこそ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クレイジーパラダイスへようこそ

【Ｎコード】
Ｎ４１８７Ｖ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ディスコに女の子を引っかけに行った俺達。そこで俺達が体験したことは。チェッカーズシリーズ第六十五弾、初期の軽快な曲です。

第一章

クレイジーパラダイスへようこそ

「おい、どうする？」

俺は仲間達に尋ねた。学校の食堂でだ。ハンバーガーやホットドッグをコーヒーで流し込みながらだ。一緒にいる連中に尋ねた。

「これからな」

「ああ、放課後な」

「学校の後か」

「どうするかってか」

「バンドの練習やるか？」

一人がこう言ってきた。

「今日は」

「そうすっか？」

「暇だしな」

「それでどうだよ」

「なあ」

「バンドもいいけれどな」

けれど俺はここで皆に言った。俺を含めて七人、何をするにもこのメンバーだ。このハイスクールじゃ俺達を知らない奴はいない。

その中の一人の俺がだ。こう言った。

「他のことしないか？」

「他のこと？」

「何だよ、それって」

「何処か行くのかよ」

仲間達は俺の言葉に六人共怪訝な顔になった。

「行くにしても何処だよ」

「バーか？」

「それともビリヤードか？」
「何処だよ」
「ああ、わかった」
一人が言ってきた。口髭の奴だ。
「あそこだろ。ディスコだろ」
「そこで女の子ひっかけるってか」
「それで後は好き勝手にパーティーだね」
色の白いのと細目のの言葉だ。
「何かそれもいつも通りだし」
「それでもいいけれどね」
「だよな。ありきたりだな」
「それか？」
のっぽとリーダーがこう言ってきた。
「それじゃあな」
「今一だよな」
「何か他に面白いこと」
「あるか？」
「酒？」
俺の弟の言葉だ。兄弟でこのグループにいるってことだ。
「飲む？」
「いつもだろ、それ」
「まあいいけれどな」
「それもな」
皆それで納得しだした。けれどここで、だった。
俺は何となく。こう皆に切り出した。
「酒もいいけれどな」
「んっ、何だよ」
「まだあるのかよ」
「一緒にビデオでも観ないか？」
酒だけじゃ物足りないと思ってこう提案した。

「それでどうだよ」
「ビデオか」
「ああ、そういえばレンタルビデオショップな」
「結構いいビデオ多いよな」
「そうだよな」
仲間達は俺の今の言葉に頷いてきた。
「それじゃあ酒と一緒にな」
「ビデオで映画も観るか」
「ついでに酒のあても買ってな」
「そうするか」
「ああ、それじゃあな」
「まあバンドは明日でいいか」
最後にバンドについてはそれで終わった。こんな話をしてからだ。

第二章

俺達はハイスクールの後でレンタルビデオショップでビデオを色々借りてそれと酒も買った。缶ビールに安物のワインを適当に買った。それとソーセージにチーズ、サラミ、そんな酒もあても買った。それで俺の家に入ってそこで七人でテレビの前に来た。

それからだ。リーダーが皆に言ってきた。

「でだ、最初は何観る？」

「ハーレーロマンスでいいだろ」

髭がこう提案した。

「それでどうだ？」

「ゴージャスな恋愛ものかあ」

「最初はそれでいくか？」

「とりあえず純愛楽しんでな」

「そうするか」

他の面々もそれに頷いてだった。それからだった。

その映画をセットしてそこから観る。ビールもそれぞれ開けて飲みだす。適当にソーセージやらサラミやらも出して食べだす。

そんな中で映画を観ているとだった。

「何だあれ」

「おいおい、キャデラックかよ」

「いいねえ」

「まあ色が滅茶苦茶だけれどな」

主人公が乗るピンクのキャデラック。正直有り得ない。けれどその有り得ないのに乗って変に颯爽と出て来る主人公が最高だった。

しかも恋愛の内容が凄かった。強引にも程があった。

「いきなり出て来てな」

「それでライバルがおかまってな」

「有り得ないだろ」

「しかもお互い一目惚れ同士」
「ないない」
「有り得ないだろ」
七人全員が否定した。とにかく滅茶苦茶な話だった。
それでもだった。俺達は観終わってから言った。
「面白かったな」
「そうだよな」
「ああ、何か感動したよな」
「よかったじゃないか」
酒に酔ってるせいか妙にハイテンションだった。弟は赤ワインをラッパ飲みしながら言う。そうした中で七人全員で話していた。
そしてだった。次は。
「今度はこれにしない？」
「あっ、それなんだ」
誰もが知っているスペースオペラものだった。ビームの刀がいい。
白がそのビデオを持って細目が頷いてだった。それでだった。
今度はそれになった。そのビデオを観る。
「いいねえ」
「だよなあ」
「やっぱり宇宙はこうじゃなくちゃな」
「そうそう」
「いい感じだよ」
これまた七人で言い合って楽しく観る。何時の間にか煙草も出ていてそれもふかしながら観る。校則なんて糞くらえだった。
最後に黒いマスクが焼かれる場面まで観て。のっぽが言ってきた。
「何か続編あるんだって？」
「あったっけ」
弟がのっぽに応える。
「そんな話あったの」
「作るとか言ってるけれどな、どうやら」

「へえ、そうなんだ」
弟はのっぽのその言葉に頷いて言った。
「それもいいかな」
「いいよな、それじゃあな」
「それも期待するか」
「まあ早いうちにその続編観たいよな」
「何年になるかわからないけれどな」
「俺達が卒業するまでは無理だな」
こんな言葉も出て来た。この言葉は残念ながら当たった。俺達がおっさんになってからそれが完成して観るとは思わなかった。

第三章

けれどだった。その中でだった。
三本目だった。それは。
「ああ、バンドな」
「へえ、バンドを結成してメジャーになるまでか」
「アメリカンドリームってやつだよな」
「それだな」
こんな話をしてからだった。俺達はそのビデオも入れた。もうビールが滅茶苦茶に回ってきていてテンションもおかしくなってきていた。
そしてだった。それを観ていてだった。
俺はだ。つい言った。
「なあ」
「んっ、何だ？」
「どうしたんだ？」
「何かあったのか？」
「何かな」
俺は酒が入って真っ赤な顔になって話した。
「急に歌いたくなったんだよ」
俺はバンドじゃボーカルだ。それもメインのだ。髭と白もボーカルをやってる。ボーカル三人、合わせて七人の大所帯のグループでやっている。
「何かな」
「歌うか」
「そういえばな」
「俺もギターしたくなったな」
リーダーが俺に続いてくれた。
「何となくだけれどな」

「俺もだな」
「俺も」
今度はのっぽと細目だった。
「ベースあるしな」
「ドラムあったかな」
「ああ、あるぜ」
俺が細目に答えた。
「古いのだけれどな」
「じゃあそれでね」
細目は笑顔で俺の言葉に頷いた。それでだった。
そのうえでだった。弟もだった。
「俺もサックスを出してね」
「よし、じゃあな」
「僕もね」
最後は髭と白だった。
「これで決まりだな」
「もうお酒かなり入ってるけれど」
それでもだった。俺達はもうそれでもよくなってきた。
ビデオが終わったところでだ。七人一斉に立ってだ。
「じゃあな」
「かなり酔ってるけれどな」
「それでもだよな」
「歌うか」
「演奏するか」
こんな話をして出たのは家の駐車場だった。そこに楽器を持って来てだった。そのうえで七人で位置についてからだった。
そして歌う。その時俺は足元がふらついちまった。
「おっとっと」
「おいおい、しっかりしろよ」
「酒大丈夫かよ」

「飲み過ぎじゃないのか？」
「歌えるか」
「へっ、これ位じゃな」
俺は足をまたしっかりとさせてそのうえで言い返した。
「全然平気だよ」
「だったらいいけれどな」
「まあそんなこと言う俺達もな」
「結構以上に飲んだからな」
「だよな」
実は全員飲み過ぎていた。ビールもワインも飽きるだけ飲んでいた。全員顔は真っ赤になっていてにやにやした顔になっている。

第四章

そんな有様でふらふらとしながら。俺達は演奏をはじめてだった。
「じゃあ楽しくやるか」
「明日もこんな調子か？」
「酒飲んで楽しくやって歌って」
「そうやってくか？」
こんなことを話してだった。俺達は楽しい音楽の中に浸った。
そんな俺達のパラダイス。ハイスクール時代はこんな調子だった。今と思うと馬鹿なことばかりしていた。けれどそれが楽しくて仕方なかった。
今も七人で集まってだ。その話をする。
ここでもビールにワイン、それと適当なあて。ビデオを観ながら話す。
「続編出てほっとしたけれどな」
「だよな。あのおっさんも若い時はこんなんだったんだな」
「悪に染まる前は凛々しかった」
「しかも善人だった」
「それがなああなったってのか」
「人間変わるよな」
「全くだよ」
このことは全員で実感した。心から。
「俺なんかもう腹がこんなに出てな」
「俺はもう髪の毛真っ白だぜ」
「禿げたよ、ったくな」
「俺もだ」
「もうあの頃が懐かしいよ」
こう全員で言い合う。七人集まればそれだけで。
「あの時は好き勝手やってたな」

「そうだよな。ハイスクールの頃は」
「今じゃ全員結婚して子供もできてな」
「俺なんてあれだぜ」
リーダーが笑いながら言う。もう髪の毛にツヤがなくなり随分しなびた感じになっている。俺にしてもそうだけれど随分と老けたものだ。
「もう上のガキがな、今度結婚するんだよ」
「おいおい、もうかよ」
「じゃああれか？孫できるのも近いってか」
「お爺ちゃんかよ。それって」
「早いな」
「俺だって信じられねえよ」
リーダーは口を尖らせて言うばかりだった。
「本当にな」
「だよな。俺の子供だってもう大きいしな」
「こっちもそうだしな」
「じゃああれか」
「そした覚悟も必要になるか」
「辛い話だな」
「全くだぜ」
何か齢を感じてそれで辛くなってきた。しかしだった。
ここでだ。俺がまた言ってしまった。特に考えることはせずにだ。
「まあそれでもな」
「それでも？」
「何だよ、それでもって」
「おっさんになった俺達に何かあるか？」
「それでな」
「いや、こうして集まればな」
どうなるかというのだった。俺は笑いながら話した。
その右手にはビール、目の前にはソーセージにスモークチーズ。

そしてビデオがある。確かにビデオの性能もよくなってビールもソーゼー時も美味くなった。けれどなのだった。
「同じだよな」
「同じかよ」
「何と同じだよ、それじゃあ」
「一体」
「昔とな。ハイスクールの頃とな」
その時からだというのだった。俺はこう言った。
「老けたし色々なもんを抱え込んじまったけれどな」
「それでも同じか」
「かもな。こうして集まって騒いで飲めばな」
「俺達は同じか」
「あの時と」
「そう思うぜ。だからな」
ビールを片手にだ。俺はまた言った。
「楽しくやろうぜ」
「幾つになってもか」
「こうして七人で集まって」
「それで楽しく騒いでビデオ観て」
「そうするか」
「ずっとな」
こんな話をしてだった。俺達は中年になっても七人で楽しく過ごした。ハイスクールの頃の思い出はそのままにして。いささかいかれた楽園の中でずっと暮らしている。仲間がいればそれでどこも楽園ってことだ。

クレイジーパラダイスへようこそ　　完

2010.12.6

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4187v/

クレイジーパラダイスへようこそ

2011年8月2日03時29分発行